2016 年 2 月 20 日

「死はこわくない」（著者　立花隆）を読んで

文芸春秋社を退職し、学士入学した東大哲学科在学中、著者は雑誌『諸君』の編集を手伝っていた。その雑誌の身上相談コーナーで、回答者である哲学者の次の言葉に、著者は安堵したという。

「一人で寝ている。明日起きた時自分がいなかったらどうしようと思うと、恐ろしくて眠れなくなる。正直言って、今でも死はこわいですよ。自分と言うものがなくなっちまうってことは悟りきれない。」

著者がそれまで心に秘めていた死に対する恐怖は、決して女々しいことではなく、誰もが思う共有の感覚であったという、安堵感である。

正直言って私自身、死というものを考え始めると、恐怖を覚えて気が狂いそうになり、すぐに思考停止状態になり混乱してしまう。

著者は、ギリシャの哲学者エピクロスの言を引用する。「人生の最大の目的とは、アタラクシア(心の平安)を得ることであり、人の心の平安を乱す最大の要因は、自分の死についての想念です。」

著者の一連の医学に関する創作の根底には、死というものを理性的に解釈し認知することによって、心の平安を得ようとする自身の強い思いが、昔からずっと深く流れていたのかも知れない。

著者の臨死体験に関する見解について、大きな影響を与えたものとして、ミシガン大学のボルジカン博士の研究がある。次のような実験だ。

「マウスの脳に電極を埋め込み、薬物注射によって心停止を起こした後の脳波を調べると、心停止後数十秒にわたって、微細な脳波が続いていた。これまでは心停止すると数秒で脳への血流が止まり、それと共に脳波も止まると考えられてきたが、それは単に測定の感度が低すぎたからだった。」そして、同じ実験の流れの中で「死の間際にネズミの脳の中で、セロトニンという幸福感を感じさせる神経伝達物質が大量に放出される現象が確認された。」

著者が取材した臨死体験の人々の多くは幸福感に包まれるという共通の体験があり、この実験の結果には説得力がある。

心(意識)は脳の特定部位に存在するのではなく、脳の神経回路の複雑な繋がり(蜘蛛の巣のように複雑なネットワークを持つシステム)によって生まれるという最新の理論が注目されている。ウイスコンシン大学の神経科学者ジュリオ・トノーニ「意識の統合情報理論」である。この理論が正しければ、死によって脳のネットワークのつながりが消え、心も消えることになる。

しかし、脳の働きには神経のつながりをベースにする電気信号系的な働きと、神経と神経の隙間(シナプス)をつなぐ神経伝達物質(セロトニンなど)をベースにするウエットな化学物質系の働きがあり、両面からのアプローチが必要であると、著者は説く。

心(意識)は脳内の現象である。
意識と無意識の境界域を変性意識といい、臨死体験も変性意識の中の現象として考えることができる。

「万人が夜になると意識を失っている。そして、すべての人が起きるとともに意識が蘇ってくる。考えてみればすごいことです。」
「麻酔も意識と無意識の境界領域にある状態をつくり出します。ある種のケミカルな物質を身体に注ぎ込むと脳はマヒしてしまう。麻酔がなぜ効くのか、科学的には何もわかっていない。」
夢も麻酔による脳のマヒも変性意識の中の現象である。

著者は説く。「結局、死ぬというのは夢の世界に入っていくのに近い体験なのだから、いい夢を見ようという気持ちで人間は死んでいくことができるんじゃないか。」

そして何よりも、著者が引用したエピクロスの次の言葉に、私は深い感銘を受けた。
「あなたが死を恐れる時、死はまだ来ていない。死が本当に来た時、あなたはそこにいない。だから死は恐れるに当たらない。」

人は100%必ず死を迎えるし、誰一人例外はない。
私はこの本を読んで、著者の大いなる説得力に、正直、救われる思いがした。